

2020年5月17日(日)

## 上尾合同教会

聖書 ゼカリヤ書 8章 20~21 節

ヨハネの黙示録 3章 20~22 節

説教 「黙示録⑳ー私は戸口に立って、たたいている」

武田真治牧師

皆さま、お元気でお過ごしでしょうか。今、国の自粛要請を受けて、まさに普通の礼拝を持ってない状況にあります。近くの教会では、完全に教会に入ってこないように、扉を閉ざしておられる教会もあります。まさに、ロックアウトですね。不思議なもので、今日の聖書箇所は、まさにそのような私たちの状況を本当に沿っていると申しますか、順番にヨハネの黙示録を読んでいるんですけども、今日の箇所は不思議に私たちへの言葉だなという気が致します。もう一度見てください。ヨハネの黙示録第3章 20節、457頁。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」

「戸を開けなさい。」いやあ、本当にこの教会の扉を開けるべきか、どうすべきか、本当に問われている時に、「扉をあけなさい。」と言われているこの言葉は、ずしりと私自身の心に響いてきます。一日も早くその日が来ますことを、また、来させなければいけないことを思わされています。

多くの解説者が口をそろえて言っておりますことは、この3章20節「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。」という言葉は、ヨハネの黙示録の全体の中で、最も愛されてきた、最もよく用いられてきた聖書の言葉というふうに言われています。なるほど、そうかも知れないと思います。昔から、特に絵や音楽でも、この聖書の箇所、この場面でイエスさまが扉をたたいていらっしゃる有名な絵がありますね。イギリスの画家で、19世紀後半から20世紀初頭に活躍を致しましたホルマン・ハント。聖書の言葉を題材にして良く絵を描かれた方ですけれども、「世の光」The light of the world という題名の絵があります。まさにこの場面です。真ん中にイエスさまが、茨の冠を被ったイエスさまが登場します。でも復活のイエスさまなんです。そのイエスさまの頭の後ろには、光の輪があるわけですね。これ<アウレオラ>というんですけども、イエスさまの光輪といえますか、復活のイエスさまですから、服は非常に王様のような、祭司のような豪華な服を着てらっしゃいます。そして、扉の前に立って、左手にはランプを持ってらっしゃる。<世の光>ランプですね。夜の感じなんでしょうね。そして、右手で扉をノックしているんですね。

これは、今でもロンドン市内のセントポール大聖堂というイギリス国教会のロンドン司教座がある教会ですけれども、そこに寄贈されていて、その廊下に飾られている。今でも見ることができる絵なんですね。それには逸話がありまして、あるイギリスの解説者が言ってるんですけども、彼がその絵を晩年に描いて寄贈した時に、彼の友人が不平不満を漏らしたそうです。どう漏らしたかということ、この絵にはノブがない。ノブというのは、扉をガチャッと開ける、あのノブですね。それが無いのはどうしてだ。おかしいじゃないか。ということ、ホルマン・ハントに尋ねたそうでありま

す。そうすると、これじゃ開けられないじゃないかと友人は言ったけれども、ハントはそれが重要なんだと答えたと言うんですね。なぜならば、この扉は内側からしか開けることが出来ないのだ、と。なるほど、ノブがないというのは外側からガチャッと開けられないんですね。イエスさまがトントントンとたたいてらっしゃるんだと。まさに、今日の聖書の箇所はそういうことなんです。20 節「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、～」つまり内側から、イエスさまの開けてくださいという声を聞いて、内側から戸を開ける。それでなければ、イエスさまは入ろうとなさらないし、入らないんだという。そういうことなんだということです。なるほどと思わされます。

この場面というのは、讚美歌にも良く歌われています。この説教の後に歌おうと選ばせていただきました、430 番(とびらの外に) <とびらの外にたちつづけて 救いのイエスは待っておられる> <かたく閉ざした戸をたたいて 今なおイエスは呼びつづける> これも、扉をたたいておられるんだ。主よ、戸を開く、入ってください。という讚美歌なんですね。やっぱり、ちゃんと扉は内側から開くものなんだ。本当は説教の後に歌いたかったのは、前の讚美歌第二編 196 番を本当は歌いたかったんです。どんな讚美歌かという、<救い主は待っておられる おむかえしなさい ころをさだめ今すぐ 主にこたえなさい。いままで主は待たれた、いまも主はあなたが ころの戸を開くのを 待っておられる> ステキな讚美歌なんですね。残念ながら、讚美歌 21 には嫌われてしまいましたけれども、この讚美歌も心の扉を開くのを主は待ってらっしゃるんですね。私たちが内側から開かなければ、主は入ってこられないという。待っておられる。まさに今日の箇所そうなんですね。戸口に立ってイエスさまは、たたいておられる。でも、その声を聞いて、内側から戸を開かなきゃいけないんだよ。どうでしょうか。

その際、間違っはいけないことが一つあります。それは何かと申しますと、内側から心の扉を開くとはどういうことか、具体的に考えた時に、その多くでこの箇所が引用されてきた、あるいはこの聖書の箇所は、良く用いられてきた。絵でもそうだし、歌でも讚美歌でもそうだけれども、一番良く用いられてきたのは、実は説教ですね。キリスト教の代々の歴史の中で、この聖句を元に伝道説教が語られてきました。つまりそこに現れているのは何かという、さあ、イエスさまが扉を開いてらっしゃるよ。扉をたたいてらっしゃるよ。どうぞその扉を開けて、中にイエスさまを迎え入れなさい。これは、信仰を持て。今までイエスさまのことを拒否していた、あるいは知らずにいた人が、イエスさまのことを知って、そしてそれを中に入れるということは、信者になる、信仰者になる、キリストを受け入れる、信仰を受け入れるって意味なんだと、そう読まれてきた。もちろんそう読んで

構わない。その聖書の箇所のイメージとして、そこだけ取り上げて、これは、そういう意味ですと読んで構わない。読み方としては自由ですけれども、ただ本来のこの聖書の箇所の意味は、これは、ラオディキアの教会に宛てた手紙。つまり教会の信者たちに言われている言葉なんです。

また、解説者によれば、このヨハネの黙示録 2 章 3 章に宛てた 7 つの教会への手紙、イエスさまの言葉があるんですけれども、その一番最後のところなんですね。だから、7 つの教会に宛てた手紙の最後に、まとめとしてここに置かれているんだと。そういう風に、まとめとしてイエスさまが語られたという解説者も多くあるんですね。そうすると益々これは、教会員への言葉になるんです。教会への言葉となんです。求道者への言葉ではないということです。まだ洗礼を受けていない、信仰告白をしてらっしゃらない方に対して <あなたの心の扉をたたいてらっしゃいますよ。イエスさまを受け入れ、信仰を受け入れ、クリスチャンになりましょう。> って。そういう風に読んでも構わないんですけれども、この本来の意味は、実はもうすでにクリスチャンなってる人なんです。信者なんです。かつては、一度はイエスさまを信じますと告白して、クリスチャンになって生き始めた。にもかかわらず、何らかの理由、いろいろなことがあって、イエスさまを自分の心の外に追い出しちゃった。もうイエスさまと関係したくない。教会と、信仰を持ちたくない。もう私は別の生き方をしていきます。私とは離れてください。という風になってしまった信仰者たちに対して、その心を閉ざしたことに対して、トントントンとたたいてらっしゃるんだ。だから、そういう心というのは、内側から開かない。つまり心が、もう閉じちゃってるわけですね。頑なになってしまっているわけですね。だから、もう一度開けて欲しいとイエスさまがおっしゃっておられるんです。閉じてしまったその心を、どうか私に向けて開いてほしい、とおっしゃっているんです。どうでしょうか。

私は、高校 1 年生の夏に洗礼を受けました。同じに洗礼を受けた女性の、ご婦人の方がいらっしたんですけれども、とても熱心な方でしたけれども、やがて教会から離れて行かれました。今、どうなっておられるか、私には判らないんですけれども、今この説教を聞いてくださっておられるお一人おひとり、思い当たられる方がおられるのではないのでしょうか。あの方、この方、あの熱心だったあの方、どうしてらっしゃるんだろうか。この人と一緒に洗礼を受けた、あるいは、この人に導かれて教会に来た。でもその導いてくださった方が、今は教会を離れてらっしゃる、心を閉ざしてらっしゃる。どうしてなんだらうか。そういうあの方、この方の顔を思い浮かべることが出来ます。

あるいは、私共自身、私自身もそうなんです、一時期教会を離れた時がありました。いろんなことが重なったりしてね。あるいは忙しくなって、ついつい教会に足が遠のいた時期というのもありました。あるいは、教会の信仰者の、同じクリスチャンの態度や言葉につまずいて、もう教会なんか

行かない。信仰なんかやめたと思った時もあったのではないのでしょうか。だけど、そういう時にいつでも、閉じてしまった私たちの心を、トントントンとたたいておられ、大丈夫か？どうしたんだ、と。なぜそんなに頑なになっちゃったんだ。なぜ私を締め出してしまうのか。もう私はあなたの心の中に入れないんだろうか。そう問われておられる、声をかけておられるだということですね。どうでしょうか。

昨週送られてきた他の教会の教会報ですね。送られて来まして、見ておりましたら、亡くなられた方の追悼文が載っておりました。その方は、86歳で天に召されて、教会でご葬儀があって、その娘さんが追悼文を書いてらっしゃいました。そのお母さん(亡くなられた方)は、若い時にキリスト教の学校、聖和短期大学ですか、そこを出ておられた。それでキリスト教の幼稚園の先生をなさって、先生を続けてなさっておられる時に洗礼をお受けになった。ところが、結婚なさって、あとに娘さん、追悼文をかいておられるご本人ですが、その娘さんを出産なさった時に出血が多量になってですね、失明してしまわれる。視力を失われてしまわれる。そして、失望・絶望なさって、生きる力を失くされ、幼稚園の仕事も辞め、また教会とか信仰も辞められたと書かれています。もっと辛いのは、お嬢さんがそうやって自分が生まれたことでお母さんの視力を奪ってしまったということ。それでも自分を大切にしてくれたことを、「ありがとうございます。感謝します。」と書かれてあった文章なんですね。

本当にいろんなことがあるなと思います。そうじゃないでしょうか。私たちはイエスさまを追い出そうなんて想いはありませんよ。イエスさまを追い出したいなんて、考えたことはないですよ。そうじゃなくて、心を閉ざしちゃったんですよ。「もう無理だ」「もうダメだ」「何でこんなことになるんだろうか。」「どうして信仰してるのに、こんな苦しい、辛い目にあわなきゃいけないのか。」そういう事じゃないでしょうか。それは、結果的にイエスさまとの関係を断っちゃった、ということなんだということですね。イエスさまを外に追い出してしまったことになっちゃった。残念ながら。

だけどそういう時に、イエスさまが今日の箇所ですら、「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、…」とあります。追い出されたイエスさまがここで何をおっしゃっているかという、「良くも私を追い出したな。」と、今度は無理やりにね、私たちの閉ざした心をごじ開けて、中に入ってこられるか。ずかずかと。私たちの心に。そうは絶対しないと、ここでおっしゃってるわけですよ。

心を閉ざした理由はきつとある。大変だったんだ。だから、その閉ざされた心を、あなたが自ら開けることを私は待ってるよ。ずっと立ちながら待ってるよ。ただ待ってるだけでなく、トントントン、

いつも大丈夫かと声をかけ、そして心配して私はここにいるよ。そういう風に声をかけておられながら、しかし、中に立ち入る、踏み入ることはしないで、ずっとここで待っておられる。すごいなと思います。

なぜそうなさるのか、ということが次に出てきますね。「わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」何でイエスさまが中に入ろうとしてらっしゃるのかというのは、また一緒に食事をしたいからだ。あなたと一緒に交わりの時間を持ちたいからだとおっしゃるんですよ。考えてみれば、扉を、一度閉じてしまった心の扉を開くのは大変です。勇気が要ります。閉じこもっている自分の想いを、ずっと閉じこもろうとする想いを振り払わないと、そして出て行くという力が必要です。勇気も必要です。そして、開け放つというのは大変な事ですよ。時間もかかるわけでしょう。その時に、開いて、イエスさまが待ってらっしゃって、ああ、イエスさまだ。イエスさまが入ってこられて、「何で今まで俺を待たせたんだ。長いこと待ってたんだぞ。」とか言ってですね、叱られちゃったら嫌になりますよね。せっかく開けたのに何だよ。あるいは、入ってこられたイエスさまが次に「よく開けてくれたね。ありがとう。じゃあ、この問題をやってね。奉仕をやってね。仕事やってね。」なんて命じられたら、「おいおい、なんだよ。」みたいな、そういう風になってしまったら、これは開けなきゃ良かったとなるわけです。イエスさまはそんなことは求めておられないんだ。

もう一度言いますと、イエスさまは「あなたと一緒に食事がしたい。」この<食事をする>という言葉は、ギリシャ語の言葉で、<ダイプネオ>という言葉です。この<ダイプネオ>というのは、まさに英語の<dinner>ですね。ダイニング、ディナーをする。まさに、朝ごはんとか昼ごはんではなく、夜ごはんですね。夕ごはんがまさに<ディプノ>と言ったんですね。その<ディプノ>をする、<ダイプネオ>なんですね。この<ディプノ><dinner>という時間は、家族がみんな帰ってきて、当時は電気なんてなかったわけですから、ランプぐらいなものですから、食事というのは一日の仕事を終えて、最後に食事をして、そして寝床にそれぞれ就くという時間なんですね。時間も長く食事をするわけです。そこで何をするかというと、家族が集まってきて今日一日こんなことがあった、こんな辛いこともあった、こんな大変な事もあった、こんな楽しいこともあったと、お互いに言い合って、会話をしながら食事を楽しむ時間が<ディプノ>なんですよ、いわゆる<dinner>なんですよ。ちょっとお茶をするとか、昼ごはんを、ササッと食べるとか、そういうことじゃないんですよ。ゆっくりごはんを食べる。だから、「一緒に食事をしよう。共に食事をとろう。」というのは、共にいろんな話をしようということですよ。「これまでいろいろ大変だったね。」「どうして心閉じちゃったのかな。」

「いやあ、いろいろあったね。」ということをお互いに話し合っ、聞いて、そして楽しい交わりの時間をもって、イエスさまと一緒に交わって、イエスさまと共にする時間をもとう。そのためにたたいていっしやるんですよ。何か新しい仕事を言いつけるとか、叱りつけるとか、そんなことのためにイエスさまがたたいていっしやるんじゃないんですよ。

また、共に一人で閉じこもってた、その閉じこもった心を開いてくれて、良かったね。また今度こそ一緒に和もうよ。そうおっしゃっておられる。これからまた、一緒に生きて行こうということなんだ。また一緒にイエスさまと食事が出来たならば、本当に素晴らしい時間になるんじゃないかなと思います。この食事こそ、天の御国での会食なんだという解説者が多いですね。そうなんだろうなと思います。私たちもまた、もちろんこの地上で、心を開いてイエスさまと共に生きていく。もちろんその通りなんです。でも将来的には、最終的には、天の御国でイエスさまと共に食事をするんだ。それが 21 節です。「勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように。」天の御国で、最期の時にはこの食事の時があるよ。その時を待っているよ、と言うのです。

ある解説者は、イエスさまがまずその食卓に座っておられて、その隣の席へと私たちを招いてくださるんだというんですね。確かに私たちが中に入るんじゃないんですよ。主が、まず共に入ってきて、そして共に食事をし、彼もまた私と共に食事をするだろう。その食事の席に、イエスさまがむしろ用意してくださって、準備してくださって、そこに「ここが君の席だよ。ここにお出でよ。」と言ってくださっているというのが、21 節なんです。「わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように。」「あなたの席を用意しておくからね。」ということなんです。どうでしょうか。

もちろん、これは天の御国の時だと考えて、究極的にはね。でも本来は、心の扉は今開けるか、開けないか。これから開けるか、開けないか。そういう事ではないだろうか。ですから、天の御国の晩餐会のいわば証し、この地上でのしるしとして何があるかという、教会の聖餐式ですね。教会の聖餐式が象徴しているのは、キリストと共にいつか食事を。その時が、天の御国で用意されていますから、今ここでキリストを受け入れましょう。キリストの身体、キリストの杯を共にして、キリストを受け入れて行こう。あるいは、最初に申しましたが、まだ信仰を持っていない人の儀式じゃないですよ。聖餐式は、信仰を持った者、クリスチャンが毎月聖餐に与っていく。まさに今日の箇所なんです。扉をたたいて、閉じこもってしまっている私たちに対して、信仰者に対して、私を受け入れて欲しい。私を中に入れて欲しい。そして、共に食事をしようよ。私をそうやって、もちろんい

ろんなことがあるのは判る。大変だよ。こうして一緒に食していこうよ。そして、天の御国までの歩みを共にしようよ。逆に言うならば、聖餐、あるいは聖餐が行われる礼拝は、イエスさまと交わるときなんだと、今日の箇所から教えられる。そういう時であるべきだな。単に礼拝をするっていうのは、神様への捧げものをする、神さまが喜んでくださるだけじゃなくて、やっぱり交わりなんです。私たちの想いを祈りや讃美歌を通して、神様に捧げていく。イエスさまに祈っていく、申し上げるんです。そして、イエスさまの方から私たちへの教えや支持を御言葉として受け入れて、その御言葉によって生きていこう。あるいは、聖餐のパンと杯の恵みに与って、命の糧に与って、また生きていこう。それは、キリストとの交わりでしょ？キリストとの交わり、神様との交わり、そういう礼拝でなければいけないということを、改めて教えられる箇所であります。

最後にもう一つだけ、この扉をたたき続けられるイエスさまの、この扉ですけれども、もちろんこれは私たち一人ひとりへの招きですね。「だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」それで、21 節で御国の座があるということなんですけれども、もう一つの読み方、解釈として、先ほど申しましたように、これはラオディキアの教会に宛てた手紙でありますし、あるいは解説者によりますと 7つの教会への手紙の最後の部分で、結論と言いますか、そういう言葉なんだと読めるということなんです。

そうすると、例えば、この扉というのは、<心の扉>と読んできましたけれども、もう一つの読み方として<教会の扉>としても読めるんです。一番最初に申しましたように、我々はウイルスによって、教会の扉を閉じてしまっているという教会もありますけれども、その教会の扉に対してイエスさまがたたいていっしやるんだと。特にラオディキアの教会はそうだったんです。もう一度見ていただきますと、3 章 15 節「わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。」その教会自体がなまぬるい状態。つまり、いい加減で厳しさが無い。どっちつかずで、吐き出したくなるぐらいだと、イエスさまがおっしゃってますよね。17節はもっと厳しく、「あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』」とても裕福な教会であつたんですね。「と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。」本当の姿が見えてない。だからなまぬるいんだと、厳しくおっしゃってますよね。

結局そのなまぬるさとは何かということ、ほんとにイエスさまを必要としていない。逆にいうと、イエ

スさまを外に出してしまっているということです。彼らの中心にあるのは何かというと、富であったり、満ち足りよう、幸せ、この世の幸せであったり、あるいは、世の煩いですよね。この世との交わりが教会の中心であって、そこで生きていた。それは逆にいうと、イエスさまを外に追い出しちゃって状態だっていうんです。冷たくもない、熱くもない、なまぬるいどっちつかずの、それは逆にいうと問題だと言って、イエスさまが扉をたたいて開けてくれ、私はあなたの教会の中心に入っていかなきゃいけないんじゃないのか。あなた方の中心の中に、何があるか見えてない。だから、開けて欲しいとおっしゃっている。それは、教会の扉だということなんですよ。

それで、そうだとすると、とても面白い、大事なことは、「見よ、わたしは戸口に立って、<教会の扉を>たたいている。だれかわたし声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、…」誰かというのは、誰か一人でもなんですよ。つまり、教会の扉をトントンとたたいているんです。その声に気づいた一人でもその声に気づいた者がいたら、そしてその人がギイーッと扉をちょっと開けたら、そこからイエスさまが入ってこられるんだ。そして、イエスさまが入ってこられる時にそこには聖霊の風が吹き、イエスさまが新しい言葉をもって、我々を、そのなまぬるい教会に新しい聖霊を与え、力を与え、変えようとしてくださっている。そうしたら教会は変わるというんです。教会が、少しでも良くなって、だんだん良くなっていくんだと。

何が言いたいかというと、一人なんですよ。みんなが集まって、さあ、イエスさま、どうぞ入ってきてください。教会全体で、議決して総会開いて「我々、イエスさまが居ないから、イエスさまに入ってもらいましょう。」なんてそう決めてから教会の扉をバアツと開く。そうじゃないんだというんです。むしろ、たった一人だ。誰かが気づいて、ここの教会にはキリストがいない、ここの中心にキリストが必要じゃないか。あるいは、キリストの聖霊、力が、もっと、キリストの声が、ここの教会の中心に響かなければいけないんだと気づいた者が、扉を開けるんだ。イエスさまに向かって扉を開けるんだ。そのたった一人の人が扉を開けたことによって、主は入れる。「私はその一人が気づいて、一人が扉を開けてくれたから、私はその教会に入っていく。」そして聖霊を注ぎ、その教会を新しくし、また力を与え、支えていくんだよ。だから、その一人が大事なんだと、7つの教会に、今まで語ってきたフィラデルフィアやペルガモンやティアティラやサルデイスやエフェソやスミルナの教会。みんなの教会に対して、キリストが本当に扉をたたいている、教会の扉をたたいている。その中の一人でもいいんだよ。教会の一人でも気づいて、私のために扉を開いてくれるならば、そこから私が入って行って、聖霊を注ぐことができるんだと。どうでしょうか。

このことは、とても大事なことを教えてくれているように思います。もしかしたら、我々の家族や、

我々の職場や学校や、いろんな状況の中に、たった一人でもそこにおいて、キリストに対して扉を開き、そこからキリストが入ってきてくださる時に、そこが変わる。キリストの風が入ってくる。そういう一人になっていきたいな。そういうキリストに対して扉を開けるような一人になりたいな。みんながたとえ違う方を向いている、違うことを考えている中で、あるいは、みんながそうじゃないんだという状況もあるかもしれないけれども、その中で私一人でもキリストに扉を開いていく、新しい風を入れてくださいと祈り求めていく。そういう一人でもありたい、なっていきたいと思わされる箇所でした。

お祈りをします。

天の父なる御神様

今日もまた、ヨハネの黙示録を通して

あなたが私たちをいつもこうして扉をたたいてくださっていること、その声に気づかない、あるいは、自分のことで、もう精一杯で、いつの間にかあなたを自分の外に追い出してしまっているようなことはないか。

改めて悔い改め、反省させられます。

そんな想いはないんですけども、結果としてあなたを追い出してしまっている、そのような私たちでありますことを、その罪を洗い清めてください。

この教会が、本当にあなたの息吹、聖霊で、新しい風で、また新しい歩みを始めて行けますように導いてください。

そしてあなたを本当に紹介する、あなたを招き入れる一人の人として生きていくことができますように。

どうぞ主よ、この教会の扉を、この地域に、この日本に、この世界へと、開いていけますように。

何よりあなたに向かって開いていけますように。

御名によって祈ります。

アーメン